

# 説経における「候フ」について

——『かるかや』『をぐり』を中心に——

水野 恵子

## 1 はじめに

敬語ゴザアルにかかわりの深い敬語としては、尊敬語のオハシマス・マシマス・オーアル、タマフ、また謙譲語、丁寧語の「候フ」等が考えられる。本稿では室町時代末の絵入り写本『せつきやうかるかや』と版本の寛永八年刊『せつきやうかるかや』の二書、及び御物絵巻『をぐり』を中心に、説経正本における「候フ」の用法を考察する。テキストは横山重編『説経正本集』第一・第二（角川書店、昭和四三年）によった。『説経正本集』の「候フ」は、漢字の「候」か、「候」を崩した字体の「𠂔」によって表記されている。しかしまた本文中には「さふらふ・さむらふ・さむらう」等、仮名で表記した少数例も見られる。

「候フ」の元の形はサブラフであり<sup>(注1)</sup>、現在はソウロウと書いているが、正しい表記はサウラフである<sup>(注2)</sup>。「候フ」は平安時代の「侍リ」に代わって、鎌倉時代、男女ともに盛んに使われていた<sup>(注3)</sup>。謡曲本では漢字の「候」（ソウロウ）とは別に、「侍ふ・さふらふ・さむらふ」が見え

るが、これは変化前の形のサブラフで、高貴な女性がことに丁寧に話す場合に用いられた。女性がいつもこの語を用いるのではなく「候」を使う場合も多い。しかし、男性の方は使うことはないのである。当時の一般聴衆もこの区別をごく自然のものとして聞いていたらしい<sup>(注4)</sup>。この使い分けは謡曲の外、平家物語、幸若舞などにも見られる。先学によれば、特に語りものの系の平家物語で区別ははっきりしており、男性はサウラフを、女性は変化前の古いサブラフ・サムラフを用いて、より丁寧な表現をしていた。平曲指南抄、読曲之事には「男ハサウロウ、女ノ詞ノ時はサブラフ也」とある<sup>(注5)</sup>。ロドリゲス『日本大文典』では「候フ」、サブラフは「書き言葉で、後者は女子にのみ使はれる。」と見える<sup>(注6)</sup>。発音については、サムロウと表記されたものでも、ブと発音した場合があるのか、またサブラフ・サムラフのブ・ムはその中間音で発音されたかという論がある<sup>(注7)</sup>。

いずれにしろ、説経正本で見られる漢字表記「候」「𠂔」はソウロウと読み、かな書きの「さふらふ・さむらふ・さむらう」等は、漢字「候」

とは違った読みのサブラウ、サムラウなどのように読んだものであろうと考える。

本稿において「候フ」は、引用文では「候」「ひ」をともに「候」と表記し、かな書きの「さふらふ・さむらふ」などは引用文ではそのままだが、説明文においては一括してサブラフと記すことにした。

## 〔注〕

1 「候フ」は、伺候するの意の上代のサモラフが原義である。平安時代、サブラフは、サムラフ、サウラフ、ソウロウのように変化し、謙譲語——客体尊敬として働くようになる。また存在（アリ・ナリ）の意味を丁重にいったり、他の動作を丁重にいう補助動詞としての用法も生じ、また聞手への敬意を表す丁寧語——対者敬語になった。

2 橋本進吉『さふらふ』か『さうらふ』か（『文字及び假名遣の研究』岩波書店、昭和三二年、二二—二三頁）

3 院政期の『今昔物語集』には「候フ」、「侍リ」の混用が見られるが、「候フ」の方が敬意が高い。この後「侍リ」は急速に衰滅したようだ。（桜井光昭「第一章『候フ』と『侍リ』」『今昔物語集の語法の研究』明治書院、昭和四一年、二七頁）

4 吉澤義則『「ソウロウ」と「サムロウ」』（『国語国文の研究』岩波書店、昭和二年、七三頁）

5 富倉徳次郎『平家物語の解釈文法』（『時代別作品別解釈文法』至文堂、昭和三〇年、二四〇頁）

6 土井忠生訳『ロドリゲス 日本大文典』（三省堂、昭和三〇年、五八八頁）

7 「実際には今と同じくサムロオと謡ったものであろうと推測されるが、稀には『ふ』に濁点を付した例があり、室町末期にサムロオと謡ったかサブロオと謡ったかは、明確にしがたい。」（横道萬里雄・表 章校注、日本古典文

学大系『謡曲集』上、補注、四二七頁）

平曲では「ウカビ」「トブラフ」のような語は「ウカミ」「ウカビ」トモキコエヌヤウニカタルベシ」（『指南抄』）と説かれている。（富倉徳次郎『平家物語全注釈』中、角川書店、昭和四二年、二二—二三頁）

## 2 『せつきやうかるかや』二書の「候フ」

まず、絵入り写本と寛永八年版の、二つの『せつきやうかるかや』を比較し、「候フ」の用法を検討する。二書はゴザアル（ゴザル・ゴザナイを含む）使用例が一〇一例と五五例のように多いのに比して、「候フ」は両書ともに二四例で多くはない。そして、一致する箇所も少ない。

### (1) 共通例

両書はかなり共通する文脈を持っているのだが、絵入り写本「候フ」三例とサブラフ一例が、寛永版「候フ」の四例に重なるだけである。サブラフを入れなければ、三例が共通ということになる。以下、適宜例文を挙げて見てゆく。なお、以下の引用では、原文のフシの記号は省略した。傍線は筆者が付したもので、また（ ）中の算用数字はテキスト頁である。会話の場合は、必要に応じて話手名↓聞手名のように記した。

①〔絵入り写本〕た、いまかたり申候ものかたり、くにを申せは、しなの、くに、せんくわうぢの、おくのみたうに、おやこちそうとあらわいておわします、ちそうの御ほんちを、くわしくときたて、ひろめ申に、これも一とせは、ほんふにておわしますか、（402）

〔寛永版〕た、いまときたてひろめ申候ほんちは、國を申さはしなの、くに、せんくはうしによらいたうのゆんでのわきに、おやこちそう

ほさつと、いわ、れておはします御ほんちを、あら／＼ときたてひろめ申に、ゆらいをくわしくたつね申に、(3)

右の①の例は、説経師が聴衆に本地物の語りであることを告げる冒頭文で、両書ほとんど同じである。

他は形容詞「見苦し」に逆説の接続助詞「の」をついたものにある。絵入り写本から寛永版への変化を↓で表すと、「見苦しうは候へど」↓「見苦しうは候へど(ども)」二例、「見苦しうはさむらへど」↓「見苦しうは候へど」一例がある。いずれも千代鶴姫の手になる衣についていう句であるが、共通例はこれだけである。

絵入り写本では、このような逆接表現は六例(候へども 五例、候へど 一例)、寛永版では八例(候へども 五例、候へど 三例)あり、語りの常套句をなしているようだ。

## (2) サブラフ

かな書きのサブラフは絵入り写本では六例(御台所五例、千代鶴姫一例)あり、いずれも話手は優雅な女性である。

②「絵入り写本」やあ／＼いかに、いしだう丸、ち、こに、たつねおふたらは、これは三つで、すてられし、ことし十五に、なるひめか、てわたの、きぬのころもなり、見くるしうは、さむらへど、なさけにとりて、めされよと、ち、こに、これをまいらせよ(千代鶴姫↓石童丸、418)

〔寛永版〕(前略)みくるしうは候へとも、なさけをかけてめされいと、ち、こにまいらせ申へし、(同、15)

③「絵入り写本」のふ／＼いかに、よじ殿さま、さてみつからは、けふのひをは、ゑすこすまひとの、かくごなり、みつから、むなしくなるならば、はだにこがねの、御ざあるの、よじ殿さまにまいらす、かけをかくいて、たまわれの(御台所↓与次、428)

〔寛永版〕なふ／＼いかによちとの、さてみつからはけふのひを、ゑすこすまひとのかくこなり、もしもむなしくなるならば、はたにこかねのさふらふを、よちとのにまいらす、かけをかくひてたまはれの、(同、28)

②の例は前項(1)で指摘した逆接の「候へど(ども)」だが、絵入り写本の千代鶴姫の「さむらふ」は、寛永版では「候フ」になっている。が、「候フ」への交替はこの一例だけで、寛永版は絵入り写本の他のサブラフをすべて消している。しかし、寛永版は別の所で、御台所と千代鶴姫に一箇所ずつサブラフを使わせている。この場合は絵入り写本のゴザアルがこれに対応している。(例③)

女性が話手である「候フ」とゴザアルとの関係は次のようにまとめられる。

〔絵入り写本〕サブラフ	6例(御台所	5、千代鶴姫	1)
↓〔寛永版〕候フ	1例(御台所	1)	該当語なし 5例
〔絵入り写本〕ゴザアル	2例(御台所	1、千代鶴姫	1)
↓〔寛永版〕サブラフ	2例(御台所	1、千代鶴姫	1)

③の例は、御台所自身が「黄金」を持っているという意の本動詞ゴザアルをサブラフに替えたものであるが、もともと絵入り写本では寛永版と違い、補助動詞のみで本動詞「候フ」の用例がない。「ある」の意味の

ものはみなゴザアルを用いているからである(注1)。

(3) ゴザアルとの交替

ゴザアルと「候フ」の交替は、尊敬語のゴザアルが丁寧語化したために、対者敬語として働く「候フ」と重なるようになって生じたのである。

④ 「絵入り写本」いやそれかしは、くにゑくだりて、御ざあるか、く

にもとに、おわします、あねこさまも、むなしくなつて、御さあるの、あいでしさま、(石童丸↓荊菫、433)

「寛永版」くにへはくたりて候へと、くにもとのあねこさまも、は、うへさまをましかねて、むなしうをなりあつて、御さあるか、これかあねこのしこつかみよ(同、32)

⑤ 「絵入り写本」御そんしありて候は、おしゑてたまわれ、おひし

りさま(石童丸↓法然、425)

「寛永版」御そんしあつて御さあらは、をしへてたまはれ、をひしりさま(同、26)

⑥ 「絵入り写本」こはつかしき申ことにて候へども、それ女のやく

とてに、おつとのふせうを、うけとりて、たひなひに、七月はんのみどりこを、うけとりもつて、さむらうが、このこがうまれ、たひなひにせんじんし、ち、よとたすぬる、そのおりは、さて、たれや

ものをばの、ち、とさだめて、おしへんの(御台所↓重氏、404)

「寛永版」はつかしき申ことでは御さあれとも、(申略)をんなのやくとて、をつとのふせうをうけとつて、たひないに七月はんにまかりなる、みつこをうけとり申たよ、(同、4)

④の例は石童丸の会話で、丁寧語ゴザアルが「候フ」へと変化したものだ。石童丸には常套句「御存じありて候はば」を「御存じあつて御ざあらば」に変えた例⑤もある。

⑥は「候フ」がゴザアルに替わった例だが、これは御台所の言葉である。御台所・千代鶴姫の会話には、ゴザアルからサブラフへ、「候フ」からゴザアルへはあるのだが、ゴザアルから「候フ」への例がないことに注意される。女性の会話には「候フ」の使用が避けられたのではないだろうか。

以上の「候フ」とゴザアルの関係をまとめると、次のようになる。

「絵入り写本」		「寛永版」	
ゴザアル	5 例 ↓	候フ	3 例
サブラフ	6 例 ↓	ゴザアル	2 例
		候フ	1 例
			該当語なし 5 例

サブラフを含む「候フ」とゴザアル両語は、丁寧語として相互に置き換わるような近い関係にあることがわかるが、全体としてはゴザアルを減じ、サブラフも減る傾向が見える。

(4) 挿入された常套句

絵入り写本の繰り返し句「御存じありて御さあらば、——候はば」は、寛永版では「御存じあつて御さあらば」になって用例数を減らしたが、これは口語的な常套句の挿入を整理したものと考えられる。

⑦ 「絵入り写本」おふそのこととさむろうの、御みのち、は廿一、さてみつからは十九なり、あねのちよつるひめは三ざいよ、(御台所↓

石童丸、416)

〔寛永版〕該当部分なし(14)

⑧〔絵入り写本〕南無や大ひのくわんぜをん、それがし、これまでも  
いること、へちのしさひで候はず、ふくとも、ちゑとも、ねかわば  
こそ、しんりよも、にくませたまふへし(重氏↓観音、406)  
〔寛永版〕なむや大ひのくわんぜをん、らくのうへにふくく  
の、うへのとくをも申にこそ、しんにかうきはかうふるへき、(6)

⑦の御台所の単純な応答句「おふそのことさむらうの」は二例ある  
が、寛永版ではともになくなる。絵入り写本の「おふそのことで御さあ  
るの」「承りて御さあるぞ」が寛永版でなくなったのと同じである(注2)。  
説経正本の詞章には適宜、場合にに応じて挿入できる口語的常套句がある。  
⑧「別の子細で候はず」も同様に寛永版では消える(注3)。

(5) 命令形「候へ」

「候フ」は中世から尊敬語に付く用法があり、動詞連用形に命令形「候  
へ」が付く形で聞手に命令・依頼・勧誘する用例も多く見える。本来謙  
譲語である「候フ」が、尊敬すべき人物や聞手の動作に付くのは矛盾し  
ている。しかし、これは相手に対する敬意から丁寧の意を付け加えるも  
ので、丁寧語「候フ」の勢力の強さを示すものである。「侍り」にもその  
用法はなかった。命令形「候へ」の形は寛一本『平家物語』には多く見  
られる(注4)。

⑨〔絵入り写本〕しゆつけはときやう、わかさふらい、こなたゑ、き  
たり候へ(法然↓重氏、412)

〔寛永版〕ちかころしゆせうなりやわかさふらひ、かみをそつてま  
いらせん(同、10)

⑩〔絵入り写本〕なさけないよの、たうしんよ、かうやの山は、かく  
つけこと、くにへくだると、さとるなり(法然↓重氏、413)  
〔寛永版〕さて御みはかうやへてはなくて、二たひくに、くたり、  
けんそくするは一ちやうなり、けにや國にくたらんならば、一やの  
さんけ物かたりに、むりやうかうのつみかきゆるとや申、さんけを  
めされ候へ、ひまをやすくまいらせん(同、11)

⑪〔絵入り写本〕さてもうれしき御ことや、さていま、では、ち、は  
うきよに、御ざないと、こゝろのうちにそんしたに、ち、はうきよ  
に、御ざあるの、ち、さゑ、うきよに御さあらは、あねのちよつる  
ひめと、それかしに、少のひまをたまわれの(石童丸↓御台所、417)  
〔寛永版〕なふいかには、うへさま、ち、のこのよに御さないとお  
もふたか、ち、たにこのよに御さあらは、あねこさまとそれかしに  
ひまをたまはり候へや、(同、14)

⑨「きたり候へ」のような(普通動詞連用形・候へ)型は、『平家物語』  
では、上位者から下位者に対して用いられたもので威圧的、威厳ある口  
調のものとされるが(注5)、説経ではこの形式のものは多くない(注6)。それ  
に対し、尊敬語に付く「候へ」の形は、相手への敬意をいっそう強める  
表現である。絵入り写本の命令形「候へ」三例を、寛永版では省略し  
たりして、両書の例は合致しないが、寛永版では新たに作ったり(例  
⑩)、「たまわれ(の)」「おーあれ(や)」「あれ(や)」などに「候フ」  
を付したりして(例⑪)、六例に増やす。それらはみな上位者への尊敬表

現、「尊敬語・候へ」型の「召され候へ」「御入り候へ」「御らん候へ」「たまはり候へ」である。

だから、⑩のように、寛永版で法然が下位の重氏に「めされ候へ」というのは、品位を保ち格式ばった表現をしていることになる。この「候へ」の話しは絵入り写本では、勧進聖、法然、寛永版では勧進聖、法然、石童丸であり、両書ともに女性の使用例はない。

そこで『せつきやうかるかや』二書における、女性の用いた「候フ」の文節を下接語で整理すると「表1」のようになる。

表からは、かな書きサブラフの下接語は多いが、「候フ」の場合は、接続助詞のドモ・バが接するものだけであることがわかる。「候フ」に限ると、絵入り写本と寛永版では女性使用例は各々三例ずつである。女性語サブラフを減らした寛永版は、新たに「候フ」を増やしたはずだが、やはり女性の使用例は少ないのである。

### 注

- 1 拙稿『せつきやうかるかや』における敬語ゴザアルについて（流通経済大学流通情報学部紀要、第二巻、第一号、一九九七年）
- 2 右に同じ。
- 3 各正本における常套句の取捨は、一面的には割り切れない。後代正本の例を挙げる。

いかに旅の女郎たち、あのもの共が口論を。さそやふしきに覚すらん。別の仔細て候はず。（山岡太夫↓御台所、正徳版「山庄太輔」『説経正本集』第一、73）

〔表1〕『せつきやうかるかや』における女性用例数

〔絵入り写本〕		〔寛永版〕	
候へドモ	御台所 1例	御台所 2例、千代鶴姫 1例	
候へバ	御台所 1例、女房 1例		
〔候フ〕	計 3例	計 3例	
サブラフガ	御台所 1例	千代鶴姫 1例	
サブラヘド	千代鶴姫 1例		
サブラフノ	御台所 2例		
サブラヘバ	御台所 1例		
サブラフナリ	御台所 1例		
サブラフヲ	御台所 1例		
〔サブラフ〕	計 6例	御台所 1例	計 2例

- 4 従来の「……給へ」「……せ給へ」「……させ給へ」型の尊敬命令表現が古代語以来の伝統的なスタイルであるのに対して、「尊敬語・候へ」型の尊敬命令表現が中世国語としての新しいスタイルとして登場した。（西田直敏『平家物語の文体論的研究』明治書院、昭和五三年、三〇五頁）
- 5 西田直敏氏、前掲書、二九二頁
- 6 他の「普通動詞連用形・候へ」型の一例を挙げる。  
たうたいの人間もうそおつき、よおわたり候へや、（御台所↓一門、正保五年刊佐渡七太夫「せつきやうしんとく丸」『説経正本集』第一、105）

### 3 御物絵巻『をくり』における「候フ」

御物絵巻『をくり』は寛永かそれに近いころの古説経から、詞章を得ているらしい<sup>(注1)</sup>。この書は絵入り写本『せつきやうかるかや』についてゴザアルの用例が多く七一例ある<sup>(注2)</sup>。「候フ」は二五例であるが、かな書きのサブラフはない。この外にサウラフの変化形「さう」が一例ある。

① たうりかなや、ちゝこさま、それかし、たくみいたしたことの候  
(三郎↓父横山、358)

② ちゝかねいゑとは、ありわかを、ひかしやまより申をろし、くらゐをさつて、とらせたふは候へとも、うしもくらゐもたかければ、ゑほしをやには、たのむへき人かなきそとて (346)

右の①は本動詞「ある」の意味で、このような「——ことの候」の句は繰り返されている。

②は形容詞活用型助動詞タシに接続するもので、繰り返し句として「——たうは候へども」がある。『荳菴』の「見苦しうは候へども」の類句である。「候へども」は話手の父兼家の心語のようであり、しかも子の小栗に対しては不釣り合いで、文末「なきそ」がへ地の文に溶け込んでしまったようなのも整わないが、常套句をそのまま用いたための齟齬ではないか。ここは、へ地の文のそれとして見た。

③ いやそれかしは、さやうのものには、すかすして、おくよりも、のりにもいらぬ、まきいてのこま、一ひきもつて候、たゝ一は、(横山↓小栗、359)

④ さて、かう申それかしを、いかなるものとや、おほし候らん、さて、

かう申それかしは、ひたちのくにの、をくりと申ものなるか、(小栗↓照手、397)

⑤ 御らん候へ、をくりとの、むさしと、さかみは、りやうわのことく、むさしなりとも、さかみなりとも、このかいのみにいれて、はんふん、をしわけて、まいらすへし、これをさかなとなされ、ひとつきこしめされ候へや、(横山↓小栗、368)

⑥ ことにけふは、をくりかめいにちては御さなひか、よひもとし、とさきりやうまいらせ候へや、さこんのせう (伯父↓左近の尉、393)

右の③は自己の動作に、④⑤の例は聞手の動作である尊敬語に付く。

⑥は謙譲語マキラスに「候フ」が付く例である。マキラスは丁寧語化しているとも考えられるが、ここは旅の修行者へ敬意を表し、家来に命令口調でいったものだろう。

応答句「さん候」もある。

⑦ こうさへもん、うけたまはり、さん候、たうのくすりか千八しな、はんのくすり千八しな、二せん十六しなとは申せとも、(349)

次に「さう」の一例を挙げる。鎌倉時代に「候フ」は「さう」「そろ」などとも発音され、俗語として盛んに使われたものである<sup>(注3)</sup>。

⑧ そのときに、よこ山殿のお申あるうは、いやそれかしは、さやうの物にはすかすして、おくよりものりにもいらぬ、まきいてのこまを、一ひきもつてさう、たゝ一は、と、御しよもうある物ならば、つねのむまよとこゝろへて、ひきよせのらふ、(三郎↓父横山、358)

息子の三郎が敵の小栗に対する父の言葉としていっており、相手を粗略にした言葉遣いである。

御物絵巻『をくり』では「——たうは候へども」二例を除き、「候フ」はすべて登場人物の〈会話文〉にあり、本動詞は三例、残りは補助動詞である。

そして、全用例の半数以上の一四例が、尊敬語を用いた命令形「候へ（や）」である。「めされ候へ」五例、「御らん候へ」四例、「お・御—候へ」三例、「きこしめされ候へ」二例等で、繰り返し句が多い。こうして、絵巻『をくり』では、「候フ」を含む文節と「さん候」などの句の種類は、「候（終止形）、候らん、候へども、候へ（命令形）、候へや、さん候」の六種しかない。このような単純な繰り返し句が多いのは、説経の出自である大道での素朴な語り口を思わせる。

「候フ」の発話者では男性が多い。女性では乳母、女房の命令表現「召され候へ、御なり候へ、御覧候へ」の三例だけである。

特に、女主人公照手にはこの命令表現も、『せつきやうかるかや』に見えた「候へど、——ども」もない。

⑨七ふしきのありさまを、おかませたふは候へとも、みゝもきこえず、めもみえず、ましてや、ものをも申さねは、けかうに、しつかにおかめよと（390）

右の⑨は、先に挙げた②の類例だが、もし照手の心語と考えれば、照手も「候へども」を一例用いたことにはなる。しかし、ここもやはりへ地の文で、常套句を繰り返したものと考える。

また、次の例のような照手の自在なゴザアルを見れば、女性の「候フ」使用が抑制的であることは明らかだ。

⑩いつまでものをつゝむへし、さてかう申、みづからも、ひたちのものとは申たか、ひたちのものでは御さないよ さかみのくにの、よこ山とのゝひとりひめ、てるてのひめにて御さあるか、人のこをころいてに、わかこをころさねは、みやこのきけひもあるほとにと、おほしめし、おにわう、おにつく、さてきやうたいのものともに、しつめにかけいと、お申しあつては御さあるか、さて、きやうたいの、なさけによりて、かなたこなたとうられてに、（照手↓小栗、397）

御物絵巻『をくり』ではサブラフもなく、「候フ」の女性使用も少ないのである。

#### 注

- 1 横山重『説経正本集』第一、解題
- 2 拙稿「説経の敬語ゴザアルについて——『をくり』を中心に——」（流通経済大学流通情報学部紀要、第三卷、第二号、一九九九年三月）
- 3 山田巖「平家物語と中世語法」（『講座 解釈と文法』5、明治書院、昭和三四年）

#### 4 後代の正本

もともと「侍リ」に遅れて使われるようになった「候フ」は、男性を主たる使用者として使われたという（注1）。説経正本は、初期の状況とは違い、「候フ」が丁寧語として十分発達した時代のものであるが、これらの説経に登場する女性は書き言葉的になった「候フ」ではなく、より口語的なゴザアルの方を用いているようだ。

しかし、古説経の時代を過ぎ、説経が「説経浄瑠璃」といわれるよう



になった後代の正本ではどうだろうか。

まず『荳蔻』について、寛文初年（一六六一）<sup>1</sup>、江戸板木屋彦右衛門板『かるかや道心』の文章を取り上げる。

この江戸版『荳蔻』は、六段に分けられ浄瑠璃の影響をかなり受けているが、古い趣きも残している<sup>（注2）</sup>。が、ゴザアルは三例しかなく、逆に「候フ」は三六例（サブラフ 二）ある。絵入り写本・寛永版の一・五倍程度であるが、両語比からすれば、「候フ」の勢力が著しく増大したことになる。

①〔寛永版〕くわしやうは、<sup>（中略）</sup>御らんして、いかにこれなるによ人よ、なにをなけるときよいある、あこはきこしめし、たま／＼こを一人まふけてあれば、よなきするとあつてししやかたては、これなるさかりまつのしたにうつみてあれば、きのふまではなくこゑかつかまつるか、けふはし、たるやら、こゑかつかまつらぬとなくと申なり、<sup>（20）</sup>

〔江戸版〕上人は御らんして、是なる女人は何をなけくぞとはせ給へは、あかう聞召、たま／＼子を一人まうけて候へは、よなきするとしてししやかたては、是れなるさかり松の下にうつみて候へは、きのふ迄はなくこゑの仕か、けふはし、て候やらん、こゑか仕らぬと申せは、<sup>（44）</sup>

右の例は弘法大師の母あこ御前と上人の会話の部分で、絵入り写本にはこの箇所を欠いている。江戸版では、寛永版のあこ御前が用いていない「候フ」を使用させている。あこ御前は大唐の帝の娘で、「悪女」ゆえに流され日本に漂着して、弘法の母となったという女性である。優美というイメージからは離れているが、寛永版では「候フ」を用いてい

なかった。江戸版で女性が「候フ」を用いているのは、あこ御前の四例の外、御台所にも三例ある。

かな書きサブラフはサブラフナリ、サブラフ（言い切り）の形で、御台所と石童丸の会話中にある。

②わか君は御らんして、あの御そうに、おんないの数をとははやと思召、いかに御そう様、ものかとひたうさふらふ、御山のおんないはいかほとそ、ほうしはなにほと、とひ給ふ（石童丸↓聖、48）

②は少年である石童丸のサブラフで、本来の用法とは異なる<sup>（注3）</sup>。本動詞「候フ」は絵入り写本にはない。寛永版の丁重語「ある」の用法は先に指摘した。が、江戸版では、物事が「ある」の意味ではなく、人が「いる」の意味でも「候フ」を使う例が四例ある。

③〔絵入り写本〕御しやう人、このよしきこしめし、あふそのことで御さあるの、御身のち、かるかやのたうしんは、このてらにてかみおそり、なわ、かるかやのたうしんと、お申しありて御さあるか御身は、と御てまゑの、尋ねてまいると、夢を見ておふまい、見まい、かたるまいとてに、これよりも、女人ののほらん、かうやのやまへ、御のほりありて、御さあるぞ、あなたを御たつね候へとて御しやう人も、なみたを、なかさせたまふ<sup>（420）</sup>

〔寛永版〕おしやう人はこのよしをきこしめし、まんすはみたりまさゆめを、なふいかにおさなひよ、御みのち、のかるかやは、このてらへまいりかみをそり、しゆつけになりて御さあつたか、あるよのまさゆめに、くにもとにのこしをくつまのみたひと、たいなひ七月はんのみとりこか、うまれせいしんつかまつり、これまでたつね

てまいるとゆめをみて、あふまひみまひかたるまひと、それかしにひまをこひ、いまは女人の名のほらん、かうやのやまへのほられて候をや、いたわしやのをさなひやとて、お上人さまも、ころものそてをおしほりある、(16)

〔江戸版〕上人聞召、扱はかるかやのわすれかた見にて有けるか、御みか父のかるかやは、此寺に候か、正月二日のまさ夢に、くにもとのこし置、つまや子共か尋て参、なおりかへると夢をみて、今は女人の上らぬ、かうやさんに有けるそ、おさないとそ仰せける、

(41)

右は法然が、父重氏の不在を、尋ねてきた石童丸本人に告げる、語りの聞かせ所である。絵入り写本は「お申しありてござあるか」「御のほりありて、御さあるそ」「あなたを御たつね候へ」、寛永版では「しゆつけになりて、御さあつたか」「のほられて候そや」と丁寧に語っている。江戸版では文章自体を短くし、石童丸の父重氏存在をいうのに、尊敬語は用いずに、「候が」と「有ける」で済ませている。これは話し言葉の口調から遠い文語調である。ゴザアルがないことで、文章全体の用語も違ってくる。

江戸版で女性話者の用いる「候フ」の形も、「候はば、候ふ（言い切り）、候ふが、候ふやらん、候へば、候へども」のように多い。

また、男女とも終止形「候フ」で言い切る、固い言い方は、絵入り写本にはなく、寛永版で二例だが、江戸版では八例のように増えている。

次に『小栗』の場合を見る。

御物絵巻『をくり』は最も原初的な形態を止めているが、奈良絵本『おくり』も、古い説経正本に近い表現をかなり持っている。<sup>(注4)</sup>比較してみると、サブラフが照手に三例、女房に一例の計四例ある。また、これを

含めた「候フ」全体は、三九例に増えている。

④おりふしかきあみくるまをひけは、せんそうくやうとうけたまはり、つまのをくりの御ために、五日のいとまをちやうとのにこひ、くるまをひいてまいらせ申は、みつからにてさふらふなり、(照手↓小栗、381)

⑤御いきとをりは御たうりにておはします、さりながら、あたをはをんにてほうせよと、申すたとへの御さあるそ、みつからもをやになさけは候はねとも、ち、は、のをんとくと申は、わたくしならぬしたいなり、(照手↓小栗、383)

女性では女房、乳母、姥、照手が「候フ」を使用し、「候はず、候ねども、候ふぞ、候なり、候へば、候へども」の形で計一一例ある。照手が用いたものも四例あり、制約的なものはなくなっているようだ。一方ではゴザアルの用例が多く(三七例)、サブラフがかなりあるなど、古い姿も残している。

延宝三年(一六七五)版の『おぐり判官』では、ゴザアルは激減し(六例)、「候フ」は四一例ある。サブラフはない。

女性では姥一例、照手の会話も九例あり、文末で言い切る終止形「候フ」もある。

⑥いかに。女房達。百ようをしり一ようをしらざれば、あらそふことなかれと。申たとへの候。(照手↓女房、58)

⑦扱みづから父にはなれて七年。母にはなれて三とせに成。二しんのために車が引たく候也。(照手↓長、73)

なお時代が下って享保三年（一七一八）ころかとされる佐渡七太夫豊孝本『をぐりの判官』ではゴザアルは二例で、「候フ」は六一例（サブラフ一）に増加する。応答語の「畏り候、畏て候」一〇例、「さん候」六例などが多いのだが、ここでは、さらに改まった表現の「御座候、御座なく候」もある。次に照手の「候フ」の例を挙げる。

⑧是七いろの買物か、ひとりろちがふて候共、なかれをゆるさせ給へ  
とて、涙ながらに仰ける。（照手↓長、99）

⑨あのでうがみづからをかい取てあればこそ。ふたゝび君にあふてあれ。長が命みづからに。御めんなされ候へと。ことはをつくし仰ける。（照手↓小栗、107）

⑩いかにてう殿。扱みづからはみめかたちよきとて。あたいをたかくかわせさぶらふが。みづからには内にくるしき病<sup>やま</sup>ふ有。左様のみちを立れば、<sup>たちまち</sup>忽やまふあらわるゝ。何方へもうらせ給ひて、なかれのみちはゆるさせ給へ、長殿いかにとの給へば。（照手↓長、98）

女性使用例では一五例ある。女房、姥の外、照手の用いたものは、サブラフ一例の外「候フ」も一一例ある。

⑩のサブラフの用法については考えさせられる。本来はサブラフは話手の動作を謙讓するのだが、話手の身を高く買い取ったのは、聞手の「長殿」である。したがって、ここは尊敬語「給フ」などが使われるべきところであるからだ。

## 注

1 その初期の平安時代においても女性の使用が全くないのではないが、男性を主たる使用者として発生した。『落窪物語』五例中一例のみ女性、『宇津保

物語』でも男性が七割以上であった。（森野宗明「丁寧語『候ふ』の発達過程について——中古・院政期初頭における状況——」『国語学』第六八集、一九六七年）

2 寛永版のような古態はないけれども、説経節特有の調子もまだ残している。（横山重「説経浄るりの諸本」『文学』岩波書店、一九六八年十月）

3 少年の場合について次のような指摘がある。

幸若舞の寛永版本「八島」の中に例外的な弁慶、富樫に一例ずつ、童に一例の使用例がある。（吉澤義則『ソウロウ』と『サムロウ』）

葉子十行本『平家物語』巻一、八王子の御社の「童神子」発言のサブラフも、童神子自身のものではなく、関白の母上の言葉をもそのまま伝えたものかもしれないと考える。（富倉徳次郎「平家物語の解釈と文法上の問題点」『講座解釈と文法』5、明治書院、昭和三四年、一九頁）

4 横山重「説経正本集」第一、付録解題。以下の「小栗」諸本の説明も同書の解題による。

## 5 説経正本におけるサブラフ

謡曲における女性が「候フ」とサブラフをどのように使い分けたかについては、明確な規準は求め難い。しかし、感情が激している場合や、改まっている場合に用いられていることが多いという（注1）。先の豊孝本『をぐりの判官』の例でも、話手の心理としては、絶大な権力を持つ主人を敬う気持ち働いたため、本来とは違う用法をしてしまったのではないかと考える。

サブラフは数は少ないながら、『荳菰』『小栗』以外の正本にもある。次にその用例を簡単に挙げてみる。（一）中には話手を記す。

○与七郎本『さんせう太夫』 一例（安寿）

さん候けさそれかしがはまへとは申さいで、山へと申てさふらへは、かみをきられた、ぐちないあねとつりやうよりと申て、さとの山人たちとうちつれだちてまいりたか、しぜんみちにもふみまよひ、またまいらぬかよかなしやな、それがしまいりて、たつねてまいろう（安寿↓太夫、『説経正本集』第一、16）

○正保五年刊佐渡七太夫『せつきやうしんとく丸』 一例（御台所）

なふいかにつまののふよし殿、さてみつからは、みやこのものにてましませは、清水の御はそんなに、たてたるくわんのさふらへば、きよみづまふで申へし（当御台↓信吉、同、107）

○寛文元年版『まつら長じや』 一例（ごんが太夫）

こんどごんかの太夫こそ、いけにへのたうばんに、あたりてさふらふが、都へのぼり、ひめを一人かい取て下るなり、すなはち、みごくにそなへ申也、みなく御いでまし、けんぶつなされ候へ（太夫↓人々、同、174）

ほとんどが本来の用法どおり女性の会話だが、『まつら長者』だけは男性の「ごんか太夫」である。もともと『まつら長者』は時代が下るもので、文章も初期の説経とは異なる特色が見られた<sup>注2</sup>。

ここはごんか太夫の近郷への触れの言葉で、「けんぶつなされ候へ」とともに用いており、特別丁寧な気持ちを表したものであろうか。すなわち、『松浦長者』では、江戸中期『平曲指南抄』等の女の詞はサブラフという指摘が、生かされていないことになる。

サブラフはやがて江戸時代の消息文中の語句としてわずかに見える程度になり、口語にも文語にも縁遠くなつてゆくらしい<sup>注3</sup>。例外用法はこれまでなかったわけではないが（前章、<sup>注3</sup>）、時代とともにサブラフは

次第に勢力を失い、単に話相手への慎みの気持ちを強く表す、丁寧な言葉となつていったようだ。

時代は下るけれども、文化二年（一八一五）川島茂樹『消息文梯』では、このサブラフを特別に取り上げ注意をしている<sup>注4</sup>。この書は藤井高尚『消息文例』にならない、手紙の書法を教えている。

せうそこに。みづからさぶらひてとやうにいふさぶらふは。俗語に同公ツカマツリテといふ意なり。さてうつりては。さとしび言にゴザリマス。テリマスなどいふ心につかひたり。されど侍るといふ詞のごとくしげくはつかはず。そは侍るはかるく。さぶらふはいとおもき詞なればなり。（筆者注 傍線は原文のまま）

同書は続いて「はンべる」を「ゴザリマス テリマス マシタラバなどいふところに。広くもしげくもさま／＼につかへり。さればさぶらふよりはかるきうやまひのことばとしるべし。」と説明しており、特に女性語であるという断りはない。ここではサブラフが頻用してはいけなほど、重々しい敬語であることを教えているのである。

このようにして見ると、先の江戸版『かるかや道心』の石童丸、『まつら長者』のごんか太夫のサブラフの用法につなげて、豊孝本『をくりの判官』における照手の言葉も理解できるのではないだろうか。聞手への非常な慎みを表す心理が、サブラフを尊敬語のように使わたのである。

最後にこれまでの『荊萱』の絵入り写本、寛永版、江戸版及び『小栗』の絵巻、奈良絵本、延宝版、豊孝本の「候フ」を含む文節と応答句の用例数を表示する。

〔表2〕「候フ」を含む文節と応答句の用例数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
候ハバ	2	2											1	0	0	0	0	0	0	0	1	0
候ハズ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0
候ハネドモ	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	4	2	0	0	1	1	3	0
候ハン(推量)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
候ヒテニ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
候フ(言い切り)	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
候フトモ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
候フトヤ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
候フヤ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
候フベキ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
候フマジ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
候フラン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
候フ(体言)	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
候フガ(接続助詞)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
候フカ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
候フゾ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
候フゾヤ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
候フナ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
候フニ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
候フヤラン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
候フナリ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
候へ(已然形)	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
『荳』写本	2	2											1	0	0	0	0	0	0	0	1	0
寛永版	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
江戸版	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
『小栗』絵巻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
奈良絵本	0	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
延宝版	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
豊孝本	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

1 注

日本古典文学大系『謡曲集』上（補注、四二七頁）

計	39	38	37	36	35	34	33	32	小計	31	30	29	28	27	26	25	24	23
	サブラヘド	サブラヘバ	サブラフナリ	サブラフヲ	サブラフノ	サブラフガ	サブラフ（体言）	サブラフ（言い切り）		畏り候フ（畏つてー）	さん候フ	承り候フ（承つてー）	候ヘカシ	候ヘヤ	候ヘ（命令形）	候ヘドモ	候ヘド	候ヘバ
24	1	1	1	0	2	1	0	0	18	0	0	0	0	0	3	5	1	3
24	0	0	0	1	0	1	0	0	22	0	0	0	0	2	4	5	3	1
36	0	0	1	0	0	0	0	1	34	0	0	0	0	0	1	2	0	3
25	0	0	0	0	0	0	0	0	25	0	2	0	0	5	9	4	0	0
39	0	0	1	0	0	1	1	1	35	0	0	2	1	2	9	3	0	5
41	0	0	0	0	0	0	0	0	41	1	2	1	0	0	6	3	0	2
61	0	0	0	0	0	1	0	0	60	10	6	1	0	4	8	0	0	4

3 2

拙稿「説経の敬語ゴザアルについて——『をぐり』を中心に——」  
吉澤義則『ソウロウ』と『サムロウ』

4 『消息文梯』翻刻(橘 豊『手紙文の国語学的研究』風間書房、一九九八年、四五六―七七頁)

## 6 まとめ

絵入り写本『せつきやうかるかや』と寛永八年版『せつきやうかるかや』二書の本文の関係は深い<sup>(注1)</sup>。絵入り写本と寛永版の「候フ」のわずかな共通例中の一例が、冒頭の本地語りであった。このような語りは浄瑠璃風になった後代の正本では消えてしまうもので、両書の古さが知られるのである<sup>(注2)</sup>。しかし、絵入り写本における、「候フ」を使った繰り返し句や口語的挿入句を省略しているのは、ゴザアルの場合と同様、寛永版での新方針である。

鎌倉時代には「候フ」も女性語サブラフも口語として使われていたが、絵入り写本『せつきやうかるかや』や寛永版の時代は、ロドリゲスの『大文典』(二六〇四―八八年刊)が記述する状況にあるだろう。そこでは、「候、侍る、さぶらふ」が「すべて書き言葉に使はれ、(中略)言ひ方の上に敬意と丁寧さを表して、それが接続する動詞を修飾する」、補助動詞(助辞)は「一般に普通の書状に使はれ、亦書き言葉の『舞』及び『物語』にも往々使はれる。」と述べられている<sup>(注3)</sup>。

女性話者の「候フ」は両書とも少なく、用法も限定的である。ただ、絵入り写本ではサブラフの接続も多岐で、その用法がよく生かされている。しかし、都市の舞台へと発展した説経は、すでに寛永版でもロドリゲスのいう「演劇や書状で用いられる上品な書き言葉」<sup>(注4)</sup>の伝統的用語「候フ」への方向にあるようだ。

浄瑠璃化した江戸版『かるかや道心』では「候フ」の女性の用法も自由になっており、ゴザアルに対して「候フ」が使用比率を高めている。

御物絵巻『をくり』では、かな書きのサブラフの例はないが、「候フ」の女性の用例も少ない。照手がゴザアルを自在に用いていて、「候フ」を使わないのは古い『せつきやうかるかや』二書の傾向に一致する。が、奈良絵本『おくり』では、照手はサブラフの外、「候フ」を使用している。さらに、延宝版『おくり判官』・豊孝本『をくりの判官』では女性の「候フ」使用例も多くなる。

以上、取り上げた書の「候フ」とゴザアルとの用例数を対照すると、「表3」のようになる。(表のへゝ中は女性の用例数である。)

「候フ」はゴザアルの尊敬語の機能には関係せず、丁寧語機能の代替をするだけなので、ゴザアルの急速な減少に連動するような、極端な数の増加にはなっていない。しかし、後代の豊孝本『をくりの判官』では相対的に増加しており、今まで述べてきたような変化は、文語化に共通する現象として見る事ができる。

これまでも取り上げられたように、後代説経正本では尊敬表現オーアルの減少に対して、伝統的なタマフの著しい盛行がある<sup>(注5)</sup>。また、古説経で特徴的な、「―い」「―さい」を用いた親愛感をこめた命令表現も、極めて少なくなっている<sup>(注6)</sup>。

「候フ」の文節、応答句等を見ると、初期のものと比べ後世正本では「候フ」の用例・用法の増加がある。しかしながら、これは『平家物語』や謡曲での「候フ」の、多種多様な用法とは違ったものである。同じ語りの文章ではあっても、後者には口語の反映が感じとれる<sup>(注7)</sup>。

一方、説経は絵巻『をくり』に省略形「さう」が見えたけれども、後代正本では口語的自在さに乏しく、文語的に整った表現へとおさまってゆく。説経が浄瑠璃との対抗上、伝統的な古典的文体を選択した当然の結果だといえる<sup>(注8)</sup>。女性の「候フ」が増し、格別に改まった語となったサブラフが見えるのも、その一つの例証になるだろう。

注

- 1 絵入り写本『せつきやうかるかや』は、「説経アヤツリ芝居より前の、唱導説経の一伝本」で、寛永八年版は「舞台にのせて、人形を使ふ説経浄瑠璃の、古い台本としての性格が強い」(横山重『説経正本集』第一、解題、四八七頁)
- 2 荒木繁『説経節』解説・解題(平凡社、昭和四八年、三二〇頁)
- 3 土井忠生訳『ロドリゲス 日本大文典』(五八八頁、二二三頁)
- 4 補助動詞(助辞)としての「候フ」は「演劇狂言その他同類の話し言葉で(中略)盛に使はれるのであって、甚だ上品である。古風な老人や或国々では、型にはまって伝言をする場合も亦これを使つてゐる。」(前掲書、五八八頁)
- 5 絵入り写本、寛永版の『せつきやうかるかや』でのタマフの使用が少なく、オールの使用が多いのが、江戸版ではその関係がまったく逆転する。(伊東龍平「さきをいつくとおといある——説経正本における常套句について——」『国語国文』第三八卷、第七号、昭和四四年)
- 6 蜂谷清人「命令表現『(拝ま)い(落ち)さい』に関する一考察」(佐藤喜代治教授退官記念 国語学論集)桜楓社、昭和五一年)
- 7 候文にはない口語的表現の例はいろいろある。  
○さてあの雪の積りたるは松浦山候ふか(松浦鏡)、○心にまかせぬ口をしさは候(満仲)、○あら有難や候(三輪)——以上ゾウロウと読む。(湯沢幸吉郎「謡曲に現れる『候』」『国語学論考 著作集2』勉誠社、昭和十五年、昭和五四年復刻、二〇三頁)
- ツレ「これに御文の候御覧候へ。シテ」あら嬉しやまづまづ御文を見う、

〔表3〕候フ(サブラフ)、ゴザアル(ゴザル・ゴザナイ)用例数(へ女性)

『荳蔻』			『小栗』			御物絵巻			奈良絵本			延宝版			豊孝本		
候フ (サブ ラフ)	サ ブ ラ フ	候フ	候フ (サブ ラフ)	サ ブ ラ フ	候フ	24例 (	24例 (	24例 (	36例 (	24例 (	36例 (	25例 (	39例 (	41例 (	61例 (		
6	2	3	6	2	3	6	2	3	2	2	7	0	4	0	1		
へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ		
3	3	3	3	3	3	3	3	3	7	3	7	3	11	10	15		
6	2	6	6	2	6	6	2	6	1	2	7	0	4	0	1		
へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ		
101例 (	55例 (	3例 (	101例 (	55例 (	3例 (	71例 (	37例 (	6例 (	2例 (	2例 (	3例 (	71例 (	37例 (	6例 (	2例 (		
1	1	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
10	8	2	10	8	2	16	9	4	1	1	2	16	9	4	1		
へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ		

ずるにて候。(熊野) (小山弘志「謡曲を読むために」『時代別作品別解釈』)

文法』至文堂、昭和三〇年、二七六頁)

8 蜂谷清人「説経正本における敬語の変遷をめぐって——「さんせう太夫」の場合——」『共同研究 日本文学における中世と近世』研究叢書、第一三冊、共立大学文学芸術研究所、理想社、一九九四年、二七頁)